

食品従事者の便からのノロウイルス検出事例

○齋藤祐一¹⁾，武田正嗣¹⁾，林 麻貴¹⁾，清田義則¹⁾，中川 弘¹⁾

1) 株式会社BML フード・サイエンス

【目的】 ノロウイルスは主に冬季に多発する胃腸炎の原因ウイルスであり、ノロウイルスの感染拡大の要因の一つとして、本人に自覚症状のない不顕性感染者によるヒトからヒトへの感染が挙げられる。そのため、ノロウイルスの流行前に不顕性感染者を特定すること、症状消失後のノロウイルス保有者におけるノロウイルスの滞留期間を把握し、二次汚染を防ぐことが感染拡大の予防につながると考えられる。今回、当施設から分離された食品従事者のノロウイルス検出結果を集計し、月別の陽性率に基づくノロウイルスの発生時期の傾向とノロウイルス陽性者がウイルスを保有する期間についての情報を報告する。

【方法】 集計①：対象期間は2014年10月から2015年3月と2015年10月から2016年3月とした。当施設で定期的に検査実施している施設の集団を「非有症者グループ」、有症者がいる施設から提出された集団を「有症者グループ」とし、それぞれの集団における月別のノロウイルス陽性率を算出した。

集計②：対象期間は2015年10月から2016年3月とした。当施設でノロウイルス陽性と判定された受検者が、再検査後、最終的に陰性判定されるまでの日数を算出した。

【結果】 集計①：非有症者グループの2014年10月から2015年3月における陽性率は、月別に15.79%、0.37%、0.58%、0.97%、1.22%、1.94%であった。2015年10月から2016年3月では、0.56%、0.61%、0.66%、1.27%、2.17%、

1.51%であった。有症者グループの陽性率は、2014年10月から2015年3月では、1.03%、4.14%、5.77%、5.95%、8.09%、6.50%であった。2015年10月から2016年3月は、3.37%、4.68%、4.60%、7.42%、9.35%、8.09%であった。年度毎に比較すると、非有症者グループでは10月、有症者グループでは12月を除き、2014年度より2015年度の方が高い陽性率であった。また、両グループともシーズン後半にかけて陽性率が高くなる傾向が見られた。集計②：ノロウイルス陽性者が陰性判定されるまでの日数は2～4日が10.61%、5～7日が31.08%、8～14日が42.94%、15～21日が8.65%、22～30日が4.42%、31日以降が2.31%であった。対象受検者の58.31%が、陽性判定後1週間以内で陰性判定されなかった。

【考察】 集計①：非有症者グループの2014年10月の陽性率は、集計対象の母数が他と比べて少なかったため、特に高い陽性率であったと考えられる。また、両グループとも2月から3月にかけて高い陽性率が見られたことから、この期間より前にノロウイルス検査を実施し、不顕性感染者を特定することがノロウイルスの感染予防につながると考えられる。集計②：陽性者の50%以上が陽性判定1週間後もノロウイルスを保有していたことから、この期間は食品に触れる調理作業は避け、ノロウイルス検査で陰性と判定されてから業務に復帰することがノロウイルスの感染拡大を防ぐ上で重要である。